

友の会ができました！—ライブな博物館をつくりましょう—

濱田隆士 (館長)

開かれた博物館を目指してオープン

1995年3月20日。それは神奈川県にとっても、日本の博物館界にとっても、意義深い日となりました。地下鉄サリン事件の最中、まさに激動のわが国に、あかるい話題を提供できただけでも、「生命の星・地球博物館」のオープンというできごとには意味があったと自負しています。

博物館は、名前が変わっているから人気が出る、という筋合いのものでないことは言うまでもありません。地球環境問題が人類の上に重くのしかかっている時代ですし、情報のグローバル化が急速に進んでいる事態でもあることを思うと、正しい地球理解が何よりも大切というコンセプトが当然生まれてくることになるでしょう。

しかし、ただ石や生物標本を並べておけばという訳にはいかないでしょう。楽しく、わかり易く見ていただく必要があります。そこで、手で触ってもよい、写真を撮ってもよい、身障者の方にも来ていただける、地域の人々に親しんでもらえる、そんなイメージから、「開かれた博物館として」というキャッチフレーズで開館することになったのでした。

目玉のない博物館のころみ

最近の博物館や水族館、公園といった所には、やたらと恐竜の姿が目立ちます。もちろん、恐竜は世界中の人々が関心をもっている“地球アイドル”と呼べる存在ですから、引き猫ならぬ引き恐竜などという表現までとび出したくらいです。

〇〇美術館に行けばゼナンヌが見られる、△△水族館にはシャチがいるゾ、といった世の風潮は大切です。PR効果の大きな“展示アイテム”を創り出すのが、博物館運営の基本的な筋道だ、と永らく言われてきました。しかし、生命の星・地球博物館としては、意識してその流れに逆らった方針を打ち出したのです。

来館者の一人ひとりが、帰られる時に「あー、あの石はきれいだった!」「チョウチョウって何て美しいんだろう!」と思ってくださった時、それこそ

がその方にとって、この館の目玉展示なんだ、と解釈することにしたのです。博物館はたくさんのメニューを用意する役目を背負っていて、お客様側に目玉を選ぶ権利と役割がある、と主張する新しい立場に立って見たのです。

ミニ地球の博物館にしよう!

生命の星・地球博物館という、大きな名前でデビューしてみたものの、さてその中味をそれに相応しくしようとすると、これはなかなかの大事業です。もともと、私自身は、「地球は、それ自身が博物館」と言い続けていました。しかし、地球の全てが一つの博物館に収まるはずはありません。面白い所、美しい物、貴重な石、感動するシーンを、いろいろつまみ食いのように集めて地球ストーリーを組み立てる素材、いわば、メニューづくりに努力してきました。

「つまり、ミニ地球ってことなんです。」というキャッチフレーズには、こうした意味が込められている訳です。でも不思議なことに、実際の館内展示を見ていただくと、どうやらこのミニという感覚はどこかえ消えてしまうようです。やっぱり、地球は巨大な存在で、その上の地球自然は複雑かつ多様性の大きな世界だと実感してくださる方がほとんどなのは面白いことです。

生きている博物館が嬉しい

博物館、という言葉は耳にただけで、古くさい物、過去の遺物の陰気な収蔵庫、といったイメージを持つ方もいらっしゃるでしょう。残念ながら、博物館の歴史をふりかえると、確かにその要素がありました。時代の流れとこののでしょうか、そんな印象は、最近では少なくなってきたようです。

反対に、この頃の博物館はチャラチャラしてゲームセンターのようで嫌だ、という厳しい指摘もあります。科学や自然のしゅみを一般の方に上手に理解していただくという仕事は、意外に難しいものなのです。標本がいくら綺麗に陳列されていても、ラベルだけではその意義もわからないでしょう。といってくるくどくどし

た解説パネルは読んでもらえません。

一番効果的な博物館展示とはどうあるべきか、というのは、博物館にとって永遠の課題であるのかもしれませんが。“物”の展示が博物館の全てであるわけではないでしょう。テレビ技術の発達した今日、モニター展示は博物館の重要な要素として“動画像”が果たす役割は絶大です。

地球の過去に生きた多くの生物たちは、化石として石の状態でも展示されたり、骨格レプリカの組み立て像として館内に配置されます。そこに、科学的な検証を受けた復元像が添えられたり、アニメやCGでバーチャルな映像があれば、死んだ物も、生き活きと理解されることとなります。

生(なま)の博物館でありたいと思っています

音楽にしても演劇にしても、ライブの強みは言うまでもないことです。実は、博物館もそうありたいと考えているのです。では、どうやってそれを実現できるのか、私たち館員はいろいろ考え、試してみています。CPUルームを覗けるようにしたり、化石のクリーニング(掘り出し)作業や、ジャンボブックの頁づくりを公開したりしています。博物館活動は、館の建物を離れて野外にも展開できます。観察会に人気があるのはとても嬉しいことです。

ボランティアの方々や、友の会の人がさまざまな博物館活動に参加してくださること、これは、生(なま)の博物館としての最先端のあり方といって良いでしょう。「館員は皆外交員」というキャッチフレーズの館活動に加えて、開かれた博物館の生(なま)の動きが出てくるからです。

近代的な博物館には、もちろん多様な電子情報が飛び交います。モダンな機器も用意されるでしょう。けれども、博物館からの情報発信はやっぱりひとからひとへの精神が大切だと信じています。地球自然も、そこに学ぶ私たちも、常にライブでありたい、と心から願っているのです。